

市民のために如何に生かすことが出来るかということに、焦点があると考える。おそらく今後の緑問題の大きなポイントがその辺にあらうかと思う。

たまたまアメリカでは数十年前から「PARKS & RECREATION」という雑誌が出版されている。その雑誌を見ると、大変身近な住宅庭園の話、都市公園の話、自然風景地の中での遊びの話、国立公園の話などがその中に込められている。つまり公園レクリエーションというものをかなり広い概念で捉えて、ソフト面ハード面の両方をおさえている。

しかしこれは米国だけの問題ではない。東京都(旧東京市)の造園家であった井下清先生の著書で、昭和18年に刊行された『緑地生活』という本の中では、緑を生活の中心において人生を楽しもうではないかという提案がなされている。このように考えると、パークス・アンド・レクリエーションというのは緑関係者の将来像というか、あるいは緑の将来像の行き着く姿ではないかという気がする。しかし、現実には日本の公園は「量」があまりにも少ないということで、その量の充足を迫ってきた。しかし、そろそろ「花と緑の博覧会」を前にして緑を如何に生かすかということを考えなければならない。これは、どちらかといえばハード本位の造園家と、逆にソフト本位でやってきたレクリエーション関係者の両方を結びつけて、新しい時代の市民活動の中心に公園ライフ、すなわち、パークス・アンド・レクリエーションというものを位置付けられないかということである。

日本のいろんな専門分野は縦割りになっており、お互いの接点を持つのがなかなか難しいという状況がある。そこで、今回両方が協力して議論ができないかということ考えたわけである。つまり公園関係者はややソフトに強くなり、レクリエーション関係者は公園というものに注目する。そういう機会になれば本日の会がそれなりに意味のあるものになるのではないかと思う。

午前中は、大規模公園の事例として「国営武蔵丘陵森林公園」を、住区に近いレベルの研究や活動を横浜市の事例で、さらに非常に小さな、むしろ市民感覚でやられた事例として「世田谷区トポ広場」を紹介していただくことにしている。午後の部は、午前中に報告いただいたことを共通の話題としながら、さきほど

お話しした新しい公園の利用のあり方というものを皆さんで議論していただきたいと思う。

第1部 現場報告

司会(毛塚)

今日は3人の方に、現場で実際にやられている活動や色々な事例をご紹介いただくわけだが、私自身も仕事のなかで公園の管理運営の仕事を手掛ける機会が多くなってきた。確かに公園に対するニーズが多様化してきており、その結果公園にいろんなことが望まれてきた。そして公園を取り巻く状況が、造り手側にとっても使い手側にとっても難しい問題をはらんで来ているのではないかと思われる。そうした中で、公園を地域にとって掛け替えのないものにしていくには、造り手と使い手とがもう少しコミュニケーションを良くしていくことが重要ではないかと考える。今日は3人の方に報告をお願いしたが、それぞれ現場での問題点なり工夫なり具体的話があらうかと思う。スライドも御用意いただいたので活動状況なども見させていただきながら、認識を深めたいと思う。

1.武蔵丘陵森林公園のレクリエーション(小須田)

武蔵丘陵森林公園は、明治百年記念事業の一環として埼玉県比企丘陵に建設された我が国最初の国営公園である。都心からの距離60km、面積は約304ha、東西約1km、南北4kmという広大な公園である。入園者数は年間100万人を越え、季節的には春が最も多く、5月のゴールデンウィークには1日5万人以上が利用している。最近実施したアンケート調査によれば、埼玉県内の家族利用が約半数を占め、車で1時間ほどドライブして到達するというのが一般的な利用のようである。大半の来園者が「来て良かった」という感想を述べているので、森林公園の評判はかなり良いと判断している。しかし最近では付近に同じような性格をもつレジャー施設が完成し、森林公園を取り巻く状況は楽観

できるものではなくってきている。事実この数年は入園者も伸び悩んでいる。こうした中で当公園の利用促進を図る計画の一環として、レクリエーション施設の整備や催し物を行なっているわけだが、これからその事例をスライドを使って御紹介したいと思う。

- ① 植物に親しむ会(植物園) 毎回テーマを決めて野外で専門の先生による観察会を実施(年4回程度)。
- ② クロスカントリー大会(運動広場起点) 年3回実施、2月の大会は世界選手権の選考を兼ねる、専用コースあり。
- ③ 緑の散歩道 クイズ形式で草木の名前を解答しながら武蔵野の小径を散歩。
- ④ 植木草花即売会(南口) 埼玉県造園業協会の協力による。
- ⑤ 野点(草木園) 実演や抹茶の無料接待。
- ⑥ ミニSL・EL(運動広場)。1周200mの軌道上を手漕ぎで回る競技。
- ⑦ 園芸教室(催し広場) 植物の飾り方、楽しみ方を専門家に講義してもらう(年5回程度)。
- ⑧ 親子写生コンクール 園内で写生した作品を審査、出展作品は展望休憩所に展示。
- ⑨ チビッツつかみどり大会(溪流広場) 放流した金魚、ヒゴイのつかみ取り。
- ⑩ 夏休み野外学習会(宿泊施設) 宿泊形式で自然観察をおこなう。
- ⑪ 緑のパソコンウォークラリー(南口ゴール) チェックポイントでコンピューターと対話しながら自然の中を回る。
- ⑫ 草木名当てサイクリング教室(サイクリングコース) チェックポイントで草木の名前を当てながらコースを回る。
- ⑬ コンサート(第2運動広場) 春秋2回実施。
- ⑭ カブトムシを探そう(クヌギの疎林) クヌギの根元に養殖カブトムシを放し、子供たちに探させる。
- ⑮ 森林公園沼まつり(溜め池) 魚取りの伝統的方法を地元の人達に披露してもらい、沼にまつわる文化を紹介。
- ⑯ 菊花展(南口、展望休憩所) 近隣市町村の愛好家の作品500点を展示、優秀作品は表彰する。

⑰ ふるさとの遊び大会(展望広場) 岩槻市レクリエーション研究会の協力による竹馬、わら細工などの作り方、遊び方の指導。

⑱ なわとびマラソン大会(運動広場) 埼玉県なわとび協会主催。

⑲ 完走マラソン大会 最大のイベント 2500名の参加、5km、20kmの2コースあり。

⑳ 探鳥会(雑木林、溜め池) 野鳥の観察会。

その他シタケ栽培教室、みんなの森づくりなど年間40回以上の行事を行なっている。時間の関係でその一部しか御紹介できなかったが、森林公園では以上のような活動を行なっている。

2. 横浜市の公園活性化研究の事例

(1) 調査と活性化対策(出淵)

公園利用の活性化ということについては、横浜市でもかなり頭を悩ませてきた。特に横浜市のように多くの人口を抱えているところでは、如何にして少ない公園を有効に使っていただくかということを経営行政担当者の立場として配慮していかなければならない。

ところで横浜市では昭和59年度に「住区基幹公園の地域化を目指して」というタイトルのもとに公園の整備は如何にあるべきかという調査を実施した。整備指針をハード・ソフト両面にわたって作成した。その理由として、大規模宅地開発が昭和40年代の半ばから急ピッチで進んだという背景がある。つまり大規模住宅地の供給に伴う住区基幹公園の整備が、昭和45年から55年にかけて急激に増加した。しかしそれは宅地開発要項に基づき、平均的な住民ニーズに合わせた平凡な形式の公園づくりであった。最近伸びが鈍ったものの、結果的には小規模の平凡な公園が沢山出来てしまった。新しく入居した市民も公園の存在に喜びながらも、公園の「三種の神器」(砂場、滑り台、ブランコ)や造り過ぎた公園への批判(原っぱ公園を待望するといったもの)があり、住区基幹公園の評価は揺れ動いているというのが現状である。そこで整備のあり方を考え直そうということから住区基幹公園の実態を把握し、時代の流れに即

応した公園のあり方を模索した。住区基幹公園のあり方を再構築することが公園の活性化につながると考えた。

調査の方法として、ソフト面の調査に重きを置いた。住民を対象としたアンケート調査およびヒヤリング調査、横浜市庁舎内での職員へのアンケート調査を実施した。その他文献調査等を加え、職員も交えて討議を行ない、住区基幹公園の問題と課題、改善策等を整理した。併せて横浜市の住区基幹公園の推移を調査し、横浜市の特徴を把握した。

住民アンケートでは、①公園の利用格差の是正、②子供の可能性をどう引き出していくか、それに大人がどう係わるか、③多様な住民ニーズへの対応、④身近な公園の管理運営にどう関心を向けていくのか、⑤様々なレベルの参加意向に行政がどう対応するのか、などが整理され、それが住区基幹公園を地域化するための課題の発見につながった。

一方、市職員へのアンケートでは、①住区基幹公園の利用に関して、②公園の配置に関して、③計画、建設に関して、④維持管理への住民参加、⑤公園の魅力アップを個々の問題として考えるべきであるなど、公園のコミュニティ的役割を助長する上での課題が導き出された。

文献調査においては、古い年代ではハードなものに重点が置かれていて、ソフト関係の記載、つまり住民の意向を聞いたり住民参加といった事項が出てくるのは早くして昭和40年代末からである、ということなどが明らかにされた。

これらの調査からいくつかの課題が整理された。

- ① 公園を社会的にアピールすること：費用の多少に係わらず社会的な評価がなされないかぎり、公園無用論にまで発展しかねない。
- ② 様々なニーズへの対応：原っぱ待望論も含めた多様な市民ニーズに応えるための仕組みをハード、ソフト両面で作らなければならない。
- ③ 活性化に不可欠な市民の力：行政からのハード面でのテコ入れには限界があり、市民の力が不可欠である。

④ 市民への的確な情報提供：公園利用の活性化や公園および行政への理解を高めることにつながる。

⑤ 住民相互の話し合い：住民と行政の意志の疎通を図る体制づくりが必要。横浜市には千二百以上の公園に愛護会があるが、行政と意見調整を図る場がない。住民が話し合うだけでなく、行政とも結び付きのある開かれた組織を作ることが望まれる。

⑥ 公園の量的拡大。

これらの課題を踏まえ以下の点が指摘された。

- ① ワンパターンを脱却して特色ある公園づくりを目指す。これは地域に根ざした公園づくり、つまり地域の意志や趣向に係わる情報を把握し、それを反映させる方法論の問題として対応すべきである。
- ② 利用者数など量的側面ではなく、住民の意識の中にどれだけ根付いているかで公園の評価を行なうべきである。
- ③ 公園づくりや管理運営への住民参加、コミュニティ活動の促進。例えば、計画段階から住民を参加させて成就感、達成感を持たせる。それは完成後の管理運営にもあてはまる。
- ④ 開かれた体制づくり。住民が話し合いによって合意形成し、強調して活動に当たれる環境づくり。
- ⑤ 柔軟な公園整備の仕組みを用意する。既設公園ではモデルチェンジ、新設公園では段階的整備を行なうなど地域社会のニーズの変化に対応できるようにする。
- ⑥ 行政内部に公園の運営、地域対応といった側面を取り込む。
- ⑦ 公園の地域化はその素地ができたところから重点的に取り組む。そこで成果が得られれば、それが核となって周囲に広がっていく。
- ⑧ 公園の量や密度に恵まれない地域においては、複合利用、高度利用で改善をはかる。具体的な改善策として
- ① 新設される際の住民参加。広報などを通じ地元の各種団体に公園づくりの参加を呼び掛ける。

- ② 新設公園の段階的な整備。初期整備の段階で住民の意向を汲み取り、後半の整備にそれを生かす。
- ③ 既設公園のモデルチェンジ。住民のニーズ変化に応える。
- ④ 公園づくりにおけるコンセプトのメニュー・アラカルトを用意する。行政と住民、さらには住民相互でコミュニケーションを深めるための手引きとなる。
- ⑤ 公園で行なわれるイベント情報の提供。イベントへの参加を通して公園美化活動へと輪を広げていく。
- ⑥ 住民協議会の設置。住民が住区問題について相互理解を深めることによって公園の活性化を促進する。
- ⑦ コミュニティー情報の収集・提供。地域化を促進できる。
- ⑧ 関係部局との連携の強化。
- ⑨ 公園の地域化促進のキャンペーン。
- ⑩ 公園活性化のモデル事業、ノウハウの蓄積に役立つ。

(2) 住民参加の事例（岸）

次に、住民が公園づくりの段階から参加した事例として、鶴見区馬場町の「かに山公園」をスライドを使って御紹介したい。

この公園は現在実施設計中であって、ここに至るまで様々な経緯があった。元来は民有地で、昔から子供達が遊んでいた。「かに山」の名前がついたのは、周辺でサワガニが沢山取れるところからである。たまたま都市計画局の方で街づくりの調査を始めたところ、こういう面白い場所があるという情報が上がってきて、これを生かしながら公園づくりができないかという話になった。地域情報がうまくとらえられ、地主と交渉して土地が借り上げられる段階まで漕ぎ付けた例だが、こういう例はむしろ稀である。

まず、最初に鶴見区役所の中に「かに山」を考える研究会ができ、その皆様の協力を得て地元住民へのアンケート、ヒヤリング調査を行なった。また「きっかけイベント」としてタウンオリエン

テーリングを行ない、地域の良さを再発見しようという催しなどもやってもらった。子供達にどこで遊んでいるのかなどの調査も行なった。さらに、町内会の人達に集まっていただき、どのような公園がよいのか検討会を3回ほど開催した。一般にこうした運動を進める際に、運動のコアとなる人材（リーダー）を捜し、そうした人を中心に進めるのが良いといわれるが、実際問題としてそういう人を捜し当てるのは大変難しい。ここでは何人かの熱心な人がいて、区の研究会のメンバーを中心とし、そこにコンサルタントが加わって計画が進められた。検討資料として10種類の案を市の方で準備した。また区の方で検討結果を毎回広報にして流した。対象地は雑草が茂っていたので、まずみんなで草刈りをし、ゴミ拾いをした。

次に、10案を3案に絞り込み、これをあらかじめ再現してみようということで、現地にスベリ台や花壇など仮の施設を置き、実際に子供達に遊んでもらうことにした。各案について意見を投書箱にいれてもらったり、そこでわかったことについて改めて検討会を開くなどした。こうした活動を行なうなかで、地元の野球チームの人達が新たに加わり、いろいろな意見を出してくれた。

実際にこの話が始まったのが去年（60年）の秋のことで、わずか1000㎡の公園でこれだけの時間と労力をかけたところはみられない。住民の意見を聞いて公園を造ることが如何に大変かを痛感した。このような試みは、市の職員だけでやろうと思ってもなかなかできないし、また試行錯誤の連続でもある。区の職員や関係部局の協力があって初めて可能となったといえる。しかしこれだけやっても、参加してくれたのは町内会や子供会の役員といった限られた人達だったというところに問題が残る。いずれにしても、今後この公園がどうなっていくか楽しみにしている。

3.身近な公園でのレクリエーション活動（木下）

私は世田谷区の三軒茶屋で「こどものあそびと街研究会」というものをつくり、若い人達と地域の人達が仕事以外の時間に集まって研究を行なっている。そし

て「三世代遊び場マップ」というものを制作した。私自身、実際に三軒茶屋に住みながら遊びと街のかかわりについて研究してきたが、これからマップを通して実際に何ができるかを考えなければならない。つまり子供の遊び場を通して街を考えようということである。今の子供は遊びを知らないとよく言われるがこれはむしろ大人の問題ではないかという気がする。突き詰めていけば自分自身の問題でもあるのだ。例えば、昔は楽しいことが沢山あった。自然も豊かで街中で大人が仕事をしている風景が見られ、その中でイタズラをしたりした。街全体にワクワクした楽しさ、活気があった。ところが現在の街になると何となくつまらない、面白さが無い。街全体のあり方、そしてひとりひとりの生活の方向自体がそうさせている。

そこで、これからご紹介したいのは世田谷区で初めてポケットパークを造った「トンボ広場」の事例である。最初の森林公園に比べれば本当に小さな事例である。こうした小さな公園でのレクリエーションとはどう考えたら良いのか、つまり街中の小さな広場でのレクリエーションは、対象を広げて考えざるを得ないということである。つまり、何かやろうとするにはどうしても制限がある。広場という空間を越えて、周辺部まで対象を広げる、町会や商店街を巻き込んでいくことがポイントである。

また、先ほど住民のニーズの話が出たが、これは「トンボ広場」での体験を通して得たことだが、住民のニーズばかり聞いていると結局何もできなくなる。むしろ、公園のあり方やレクリエーションのあり方を自分達でしっかりイメージするべきだ。そのイメージは、本来の生活の豊かさとは何か、生活にとっての公園とは何かというところから生まれる。そのイメージを皆で共有していくことだと思う。初めに言葉ありきではなく、しっかりしたイメージさえもって活動を始めれば自然にみんながついてくる。その行動をおこすことがまた、1つのレクリエーションだと考えている。

この活動が始まった背景として、子供の遊びや環境を問題にしているお母さんたちのグループがあり、街の中のいくつかの空き地を使っていろんなイベントを行っていた。そういう空き地が次第に減少してゆき、最後の空き地が「トンボ広場」として整備されることとなった。その公園の説明会の際に、周辺の住民

とお母さん達との間で相当のやり取りがあった。周辺には初老の人が多く、孫を遊ばせるのにすべり台や砂場、ブランコが欲しい、またお母さん達は何も置かない土の広場がいいと言う。公園は双方の妥協案を入れて造られたが、あまり綿密な説明会を開けなかったために、陰悪なムードを残してしまった。説明会のあり方にも反省点はあった。そういう面で横浜市の例に習うところは大きい。

区による近隣説明会では、要求を入れてダスト舗装にし、住民による自主管理にしたいということであった。しかし、本当の土の原っぱでなければ活動が限られるとして、お母さん方が区と折衝した。その結果、土の広場にするとという案で決着した。

それでも土の広場には様々な問題はある。土ぼこりが心配だし、雨が降ればグチョグチョになる。緑を植えれば落葉をどうするか。事故の時の保障もはっきりしていなければ自主管理はできない。

私自身は子供達と一緒に花を植えるのはどうかと考えていた。そこでそういう提案をすると、今度はお母さんたちから「その世話をいったい誰がするんですか」という答えが返ってきた。ひどく痛いところをつかれた感じだったが、言い出した手前、結局私がやることになった。しかし、そうやって誰かがやり始めると周りも動き出すものだ。自転車を用意する人、花を植える空箱を魚屋さんから貰ってくる人もいた。

このようにして、区にはお金をかけて施設を造るのではなく、良い土を入れてもらった。そしてオープニングパーティとなった。こうしたイベントを行なうことが大事である。

花を植えるには、街に園芸好きのおじさんがいて、子供達にも教えてもらうことにした。子供達は名札に花の名前と自分の名前を書き、自分の責任で育てることを約束した。

説明会の席で花の管理は誰がするのかという話が出た時に、「世話は園芸好きの人がするものさ」と軽く言っていた山口さんは、開園以後ずっと水やりをしてくれた人だ。そこで山口さんには「育てる会」の会長になってもらった。

しばらく子供達も水やりを欠かさずに続けていたが、そのうちに段々とやらなくなった。そこで子供達の関心をもう一度広場に引きつけようと「花まつり」

